

令和元年6月18日現在

機関番号：62618

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02751

研究課題名(和文) 近現代の新語・新用法および言語規範意識の研究

研究課題名(英文) Research on New Words, New Usages and Linguistic Norms on Modern Japanese

研究代表者

新野 直哉 (NIINO, Naoya)

大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所・言語変化研究領域・准教授

研究者番号：30218086

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：近現代の日本語における新語・新用法の事例に関する記述的研究とそれに関する言語規範意識の研究を行った論文の発表、従来学界で注目されてこなかった資料の紹介、さらに中国で開催の国際シンポジウムで計3回の研究発表・招待講演を行った。そして、メンバー全員による共同発表として、「代用字表記語」(「当用漢字表」にない字を使う漢字語の書き換えにより、新たに生じた漢字語)に関する発表を『日本語学会』で行い、それに関連する論文を計3件発表した。また、最終年度末には紙媒体(非売品)の「研究成果報告書」を作成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

学術的意義としては、従来学界で注目されてこなかった、近現代の新語・新用法に関する言語規範意識の研究と、それに関わる新資料の発掘・収集・分析を行ったこと、単独の語史研究から語彙史研究への発展を念頭に、変化の類型として「代用字表記語」という概念を提示したこと、研究成果の海外発信として中国で3件の発表を行ったことが挙げられる。また社会的意義としては、新語・新用法に関する研究成果を示すことで国民の知識向上につながり、国語教育・日本語教育分野へも貢献できたということがある。さらに、新語・新用法に関する話題は特に若い世代にとって身近であるだけに、この世代が日本語、日本語学に興味を持つ入口にもなる。

研究成果の概要(英文)：Presentation of a dissertation researching descriptive research on cases of new words and new usages in modern Japanese and research on language norm awareness related to it, introduction of materials that have not been paid attention in the past, and an international symposium held in China gave a total of three research presentations and invited talks. Then, as a joint presentation by all members, a presentation on "Substitute character notation words" (kanji words newly generated by rewriting kanji words that use characters that do not exist in "The List of Characters for Interim Use") was given at "The Society for Japanese Linguistics", published a total of three related papers. At the end of the last year, we prepared a "research report" for paper media (not for sale).

研究分野：日本語学

キーワード：日本語史 近現代 新語・新用法 言語規範意識 言語変化 誤用 国語学 言語学

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

#### 1. 研究開始当初の背景

(1)これまでの新語・新用法研究において、発生・浸透・定着の時期やプロセスについての記述的研究は活発であった。しかし、その事象に対する言語意識、特に言語規範意識(正誤という客観的・理性的な判断に関わる意識のほゞであるが、そこには、好悪・美醜・親疎といった、主観・嗜好に基づく意識も介在する)の調査・研究については、一部の事例を除き、ほとんど目には向けられてこなかった。

(2)新語・新用法の個別の事例についての研究は活発であった。しかし、単独の語史研究から語彙史研究への発展、変化の類型性の考察という点では、いまだ不十分である。

#### 2. 研究の目的

(1)近現代の日本語における新語・新用法(必ずしも語彙には限定せず、文法・表現法等に関わる事例も含む)に関する、発生・浸透・定着の時期やそのプロセスという言語変化そのものについての研究を行う。

(2)さらに、これまでの日本語史研究ではほとんど顧みられてこなかった、そのような変化に対する言語規範意識(個別的・具体的な言語形式や言語行動様式、さらには言語一般に関する、規範やルールを問題とする意識)についての研究を行う。

(3)そして、(1)(2)の成果を統合する形で、従来の新語・新用法研究の主流である個別的な語史研究から、体系的な語彙史研究に発展させる。この研究により、日本語学界に加え国語教育・日本語教育分野へ貢献するとともに、国民の知的関心に応える。

#### 3. 研究の方法

(1)従来学界で注目されてこなかった新資料の発掘と、それを用いた研究を行う。

(2)近現代語の諸問題に関する研究を継続し、さらに体系的に発展させ、成果を学会等で発表し、論文化する。

(3)学術論文・図書に限定せず、近現代日本語の新語・新用法の研究を進展させるうえで役立つような資料を、新聞や雑誌等のメディアから広く収集し、新語・新用法の発生・浸透のプロセスの記述や、それに対する言語規範意識の解明といった研究に活用する。

(4)研究の途中経過を発表し、広く外部の意見をj得るため、公開の研究発表会を年1回程度開く。

(5)このプロジェクトの前身であった共同研究プロジェクトの成果の一つで、国立国語研究所ホームページで公開している「副詞“全然”研究のための主要文献目録」に増補・改訂を加え、内容をより充実させる。

(6)収集した日本語関係記事の目録を作成、公開する。

#### 4. 研究成果

(1)メンバーが、接続詞“しかし”、副詞“けっこう”・“なんなら”、よみがえらされる型の使用受身表現、“名前負け”といった近現代の日本語における新語・新用法の事例に関する記述的研究と、それに関する言語規範意識の研究を行った論文を発表した。

(2)従来学界で注目されてこなかった資料として、大正期の新聞・雑誌記事や、石山福治の中日辞典とその典拠となった華英辞典を紹介する論文を発表した。

(3)研究成果の海外発信として、メンバーが中国で開催の国際シンポジウムで計3回の研究発表・招待講演を行った。

(4)メンバー全員による共同発表として、「代用字表記語」(「当用漢字表」にない字を使う漢字語の書き換えにより、新たに生じた漢字語)に関する発表を『日本語学会』で行い、それに関連する論文を計3件発表した。単独の語史研究から語彙史研究への発展を念頭に、変化の類型として「代用字表記語」という概念を提示したことは特に有意義であった。

(5)研究の途中経過を発表し、広く外部の意見をj得るための公開の研究発表会を各年度に1回、計3回開催した。

(6)最終年度末には紙媒体(非売品)の「研究成果報告書」を作成した。これには、プロジェクトの紹介、29・30年度分の研究成果の論文、「2016年週刊誌日本語関連記事目録」(2016年の一般向け週刊誌8誌に掲載された日本語関連記事の目録)を収録した。

(7)国立国語研究所ホームページで公開している「副詞“全然”研究のための主要文献目録」に毎年増補・改訂を加え、各年度末に公開した。

#### 5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計16件)

梅林博人、「代用字表記語」の受容と語義変化 「{食餌/食事}療法」を例として、相模国文、査読無、46、34-45、2019

島田泰子、日本語の使用受身表現における変革の一端 よみがえらされる型からよみがえらされる型への移行をめぐって、言語文化研究、査読無、18、17-34、2019

鳴海伸一、「蒐集」「収集」の意味分化と「コレクション」 「代用字表記語」の受容の一例として、国語語彙史の研究、査読有、38、65-83、2019

鳴海伸一、「代用字表記語」としての「保育」「生息」の定着 意味分化意識の発生、言語文化研究、査読無、18、1-16、2019  
新野直哉、「名前負け」の「誤用」について、人文、査読有、17、93-114、2019  
新野直哉、大正2年『読売新聞』の日本語関係記事について 「新聞記事データベース」活用の一例として、国語語彙史の研究、査読有、38、151-166、2019  
梅林博人、接続詞「しかし」における「逆接」の認識について 明治下半期から昭和戦前の諸相、相模国文、査読無、45、76-91、2018  
島田泰子、副詞「なんなら」の新用法 なんなら論文一本書けるくらい違う、二松学舎大学論集、査読無、61、1-23、2018  
新野直哉、平成期『朝日新聞』の記事に見られる副詞“全然”に関する言語規範意識 『読売新聞』と比較して、国語学研究、査読有、57、14-26、2018  
新野直哉、大正期『文藝春秋』の記事に見られる言語規範意識、近代語研究、査読無、20、155-175、2018  
橋本行洋、『大漢和辞典』所収現代中国語の依拠資料 石山福治の中日辞典とその典拠となった華英辞典、近代語研究、査読無、20、179-203、2018  
梅林博人、滑稽本の接続詞「しかし」について、表現研究、査読有、105、1-10、2017  
鳴海伸一、程度副詞「けっこう」の成立と展開、和漢語文研究、査読有、15、262(1)-236(27)、2017  
梅林博人、『浮雲』の逆接の接続助詞と併用される「しかし」 位相、表現内容からの考察、相模国文、査読無、44、55-63、2017  
新野直哉、平成期『読売新聞』の記事に見られる副詞“全然”に関する言語規範意識、国語学研究、査読有、56、17-30、2017  
新野直哉、「世間ずれ」の「誤用初出例」について、言語文化研究、査読無、16、29-39、2017

〔学会発表〕(計12件)

橋本行洋、「教材」の成立と受容、漢字文化圏近代語研究会国際シンポジウム、2019  
山崎誠、相澤正夫、大西拓一郎、柏野和佳子、高田智和、新野直哉、間淵洋子、桂祐成、語誌データベースの試験公開、「通時コーパス」シンポジウム2019、2019  
梅林博人、島田泰子、鳴海伸一、新野直哉、橋本行洋、「代用字表記語」の受容と語義変化「食餌(事)療法」を例として、日本語学会2018年度春季大会、2018  
橋本行洋、語史・語彙史研究におけるコーパス・データベースの活用と限界 近現代語における「材」を後項要素とする二字漢語を例として、日本語学会2018年度春季大会ワークショップ「日本語史研究とコーパス活用 その利点と注意点」、2018  
橋本行洋、日中近現代語における二字漢語「～材」の産出と受容、2018 南京大学国際シンポジウム国際学術検討会(国際学会)、2018  
新野直哉、「新聞記事データベース」について 概要と活用例、「通時コーパス」シンポジウム2018、2018  
橋本行洋、新語の定着と非定着、日本語学会2017年度秋季大会、2017  
橋本行洋、複合語「よるあるき/よるありき(夜歩き)」の存否、「通時コーパス」シンポジウム2017、2017  
橋本行洋、「食材」の語誌、第113回漢字漢語研究会、2017  
梅林博人、接続詞「しかし」の逆接性をめぐって 滑稽本と『浮雲』を中心に、第139回表現学会東京例会、2016  
新野直哉、術語“慣用語”・“接頭辞(語)”が一般メディアで使用される際の意味について、第112回漢字漢語研究会、2016  
橋本行洋、日本語史上の れ足すことば、2016年度第1回近代語学会研究発表会、2016

〔その他〕

ホームページ等

副詞“全然”研究のための主要文献目録

<https://www.ninjal.ac.jp/research/project/c/newlycoinedw/files/MainBibliographyForResearch-zenzen-Adverb.pdf>

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：橋本 行洋

ローマ字氏名：(HASHIMOTO,yukihiro)

所属研究機関名：花園大学

部局名：文学部

職名：教授

研究者番号（8桁）：00243139

研究分担者氏名：梅林 博人

ローマ字氏名：( UMEBAYASHI ,hirohito )

所属研究機関名：相模女子大学

部局名：学芸学部

職名：教授

研究者番号（8桁）：30264576

研究分担者氏名：島田 泰子

ローマ字氏名：( SHIMADA ,yasuko )

所属研究機関名：二松學舎大學

部局名：文学部

職名：教授

研究者番号（8桁）：50294278

研究分担者氏名：鳴海 伸一

ローマ字氏名：( NARUMI ,shin ' ichi )

所属研究機関名：京都府立大学

部局名：文学部

職名：准教授

研究者番号（8桁）：90611799

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。